〔資料紹介〕

野呂山田貝塚出土の舟形土器

—鹿島川流域の縄文時代遺跡（２）—

田　中　英　世

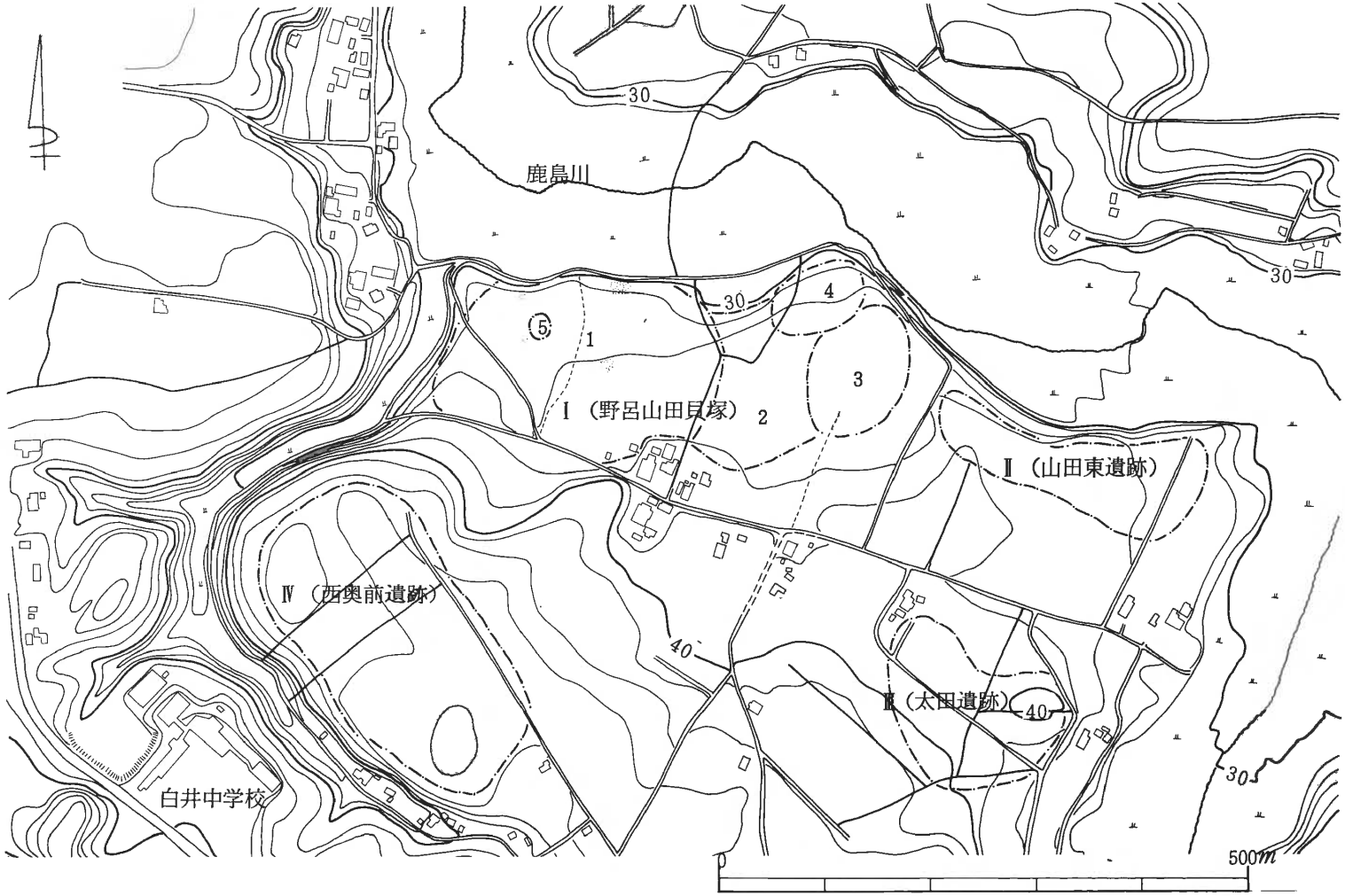
はじめに

野呂山田貝塚は千葉市野呂町山田に所在し、『野呂奥新田貝塚』として古くから知られてきた。昭和33年に伊藤和夫氏により鹿島川最奥部の貝塚と紹介され（文献１）、翌昭和34年に刊行された『千葉県石器時代地名表』には「通番号186　番号２　野呂奥新田　千葉郡泉町野呂奥新田（旧白井村）　台地上及び斜面畑　貝塚小　堀之内式・加曽利Ｂ式・安行Ⅰ式・安行Ⅱ式・貝類・獣骨　貝塚は嘗っては可成り大きかったと言われるが現状は小、附近一帯は大きな包含地で土器は頗る多い。鹿島川本谷の上限貝塚である。」と記載されており（文献２）、また同年に刊行された『日本貝塚地名表』にも通番号697（地方番号290）として記載されている（文献３）。これと前後して昭和31年には川戸彰氏により本貝塚唯一の発掘調査が、斜面に形成された比較的良好な加曽利Ｂ式期の貝層を対象として行なわれ、貝の混入した土壙が検出され土偶・骨角器・貝輪・磨製石斧・垂玉・石鏃・石皿等が採集された（文献４）。その後米田耕之助氏による踏査が行なわれ、安行Ⅱ式期の木菟土偶と安行Ⅲｄ式期の土版が採集され、遺跡が縄文時代晩期中葉まで営まれていることが確かめられた（文献５）。昭和49年には遺跡内を通る農道の拡幅工事により遺跡の一部が削平され、それに伴なって遺跡の東側にあたる部分の確認調査と遺跡全域に亘る分布調査が千葉市教育委員会によって行なわれた（文献６）他、加曽利貝塚博物館による踏査も行なわれている（文献７）。

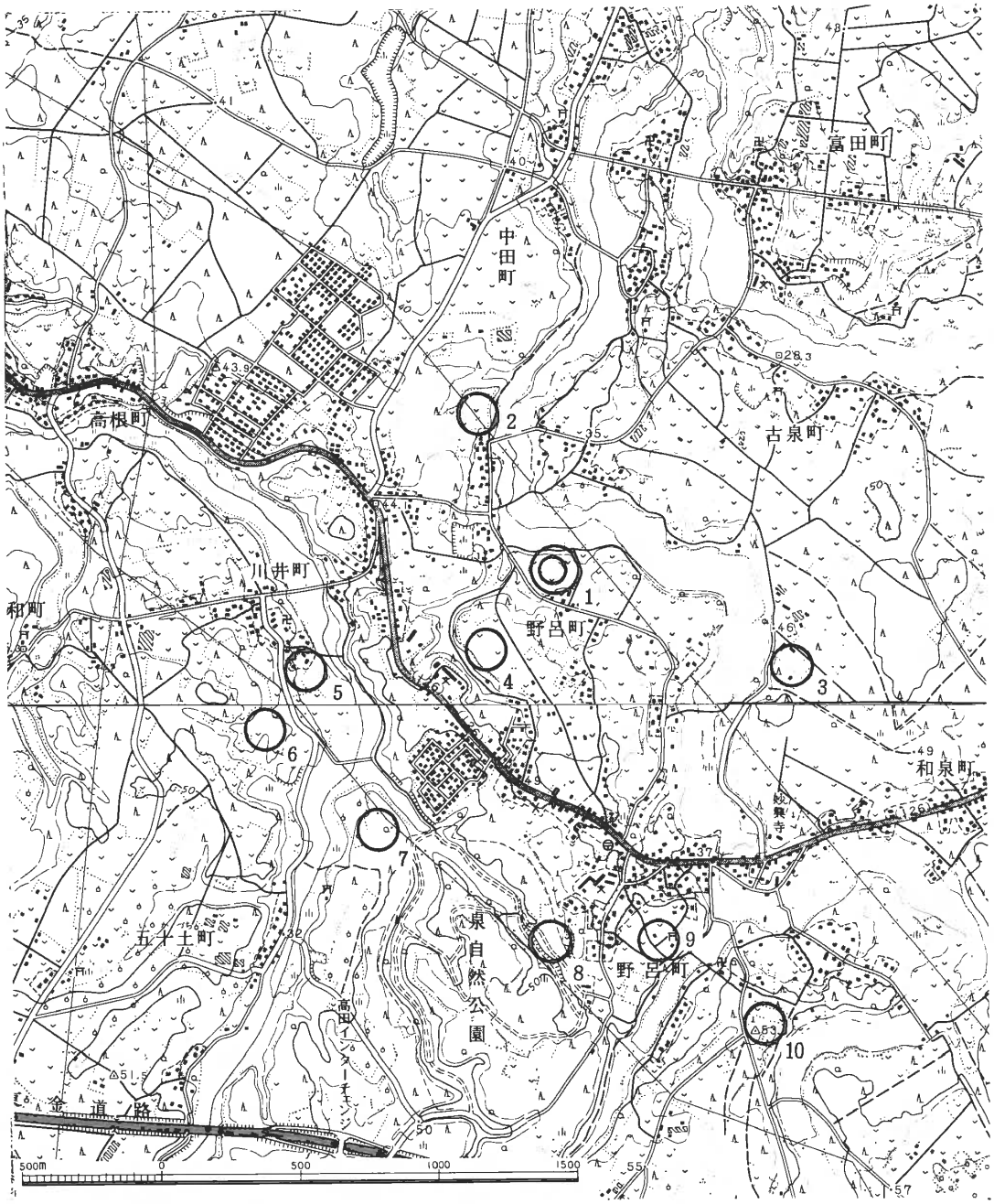
今回紹介する舟形土器を中心とする資料は、地元の中学生により採集されたものに、昭和49年の千葉市教育委員会による分布調査資料およびその後の筆者による踏査資料を加えたものである。なおこの他に東邦高校により山形土偶が採集されている（文献８）。

１　遺跡の概要

野呂山田貝塚は鹿島川を眼下に臨む標高30～46ｍの台地の北側に位置する。北流してきた鹿島川支流は遺跡を載せた台地の東側で西に方向を変え、遺跡の前面で再び北上する。台地の西側には浅い谷が入り込み、遺跡はこの谷と鹿島川支流に面した標高30～34ｍの台地平坦面および斜面に立地し、水田との比高は約７ｍを計る。台地上には分布調査により野呂山田貝塚を含



第１図　野呂山田貝塚周辺地形図



第2図　周辺遺跡分布図

1. 野呂山田貝塚
2. 宮田遺跡
3. 芳賀輪遺跡
4. 西奥前遺跡
5. 川井道ノ下貝塚
6. ヲフウデン遺跡
7. 駒込遺跡
8. 宮ノ台遺跡
9. 向堀越遺跡
10. 八反目台貝塚

めて４地点の散布地が確認されている（第１図）。

Ⅰ－野呂山田貝塚

Ⅱ－山田東遺跡　加曽利Ｅ式土器と土師器（国分）が少量ながら散布する。

Ⅲ－太田遺跡　　加曽利ＥⅠ式～ＥⅡ式土器および加曽利Ｂ式土器が少量ながら散布する。

Ⅳ－西奥前遺跡　野呂山田貝塚の南側に位置し、加曽利Ｂ式土器を主体に堀之内式～安行Ⅱ式土器がかなり広範囲に濃密に分布する。

遺跡は現在全面畑として利用されており、貝層は台地北側の縁辺部で２ケ所、平坦部で２ケ所の計４ケ所が確認されており、このうち昭和31年に調査が行なわれたのは斜面部のＡ貝層である。発掘調査によれば、貝層はハマグリを主体としてシオフキ・キサゴ・アカニシ・カガミガイ・サルボウ等によって構成される加曽利Ｂ式期のもので、他の３ケ所の貝層もＡ貝層とほぼ同じ貝種により構成されており、いずれも加曽利Ｂ式期のものである。遺物は東西150ｍ×南北300ｍの広範囲に亘って散布しており、阿玉台式土器から安行Ⅲｂ式土器まで採集されているが、主体をなすのは加曽利Ｂ式土器で、安行Ⅰ式・Ⅱ式土器がこれに次ぐ。以下地点別に散布状況を記す。

１－野呂山田貝塚の中心をなす部分で遺物の量は極めて多い。加曽利Ｂ式土器を主体として堀之内Ⅰ式～安行Ⅱ式土器が散布する他、少量の加曽利Ｅ式土器と晩期前半の土器がみられる。

２－野呂山田貝塚の一部と考えられるが遺物の散布は希薄となる。加曽利Ｂ式土器を主体とする。

３－後期の土器に混じって中期の阿玉台式土器が集中的にみられる。散布量は少ない。

４－歴史時代（真間～国分）の土器が若干集中してみられる。

５－野呂山田貝塚の中心部に位置し、後期の土器に混じって晩期前半の土器が集中する。

以上が遺跡の概要であるが、周辺の遺跡としては八反目台貝塚・芳賀輪遺跡・宮田遺跡が同じ鹿島川流域に、宮ノ台遺跡・川井道ノ下貝塚・駒込遺跡が都川流域に存在する（第２図）。

２　遺物の概要

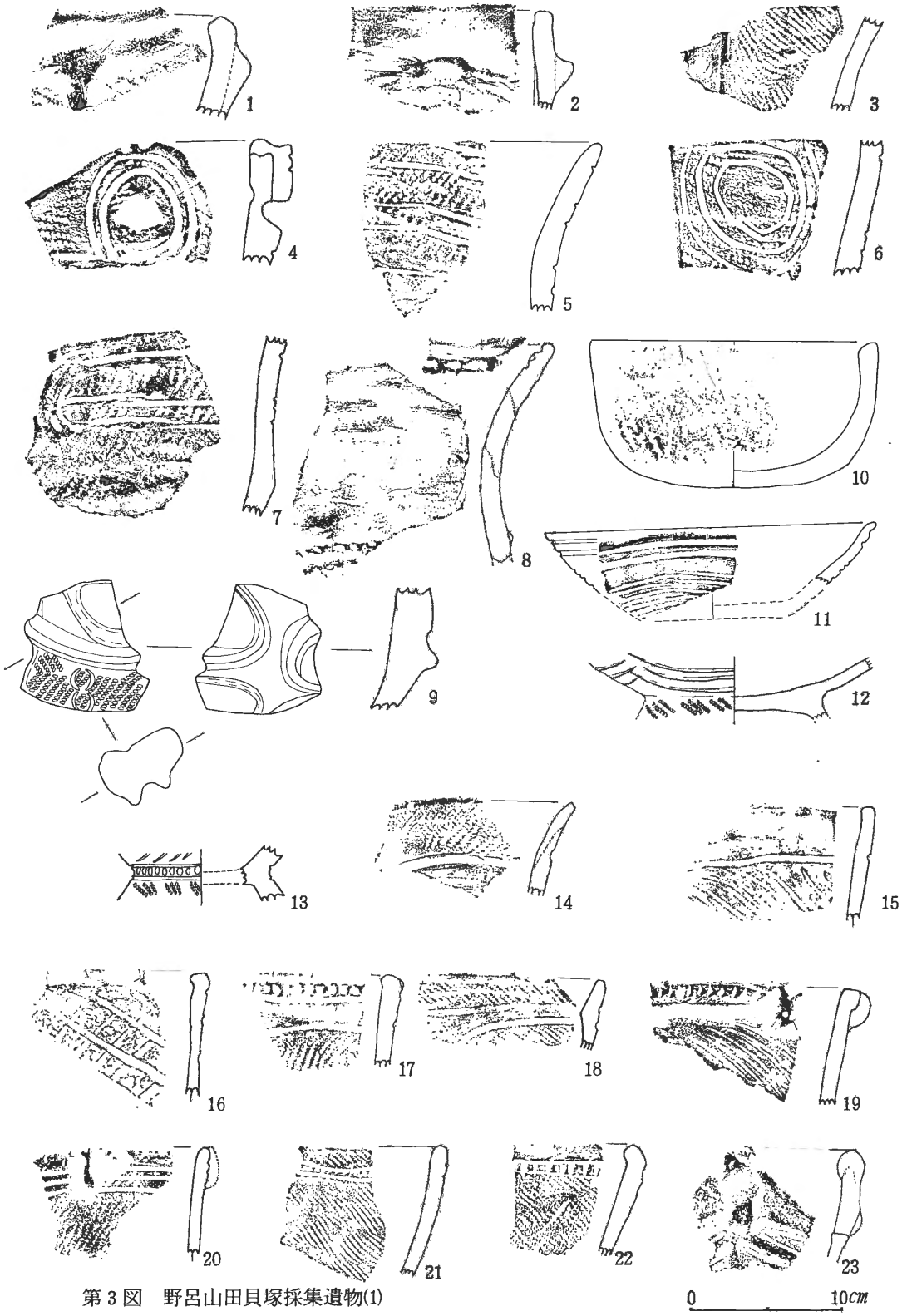
今回紹介する遺物は縄文時代中期～晩期前半の土器の他に、舟形土器・木蒐土偶・環状耳飾・定角磨製石斧・石皿・垂玉・鹿角等である。

Ａ　土　器

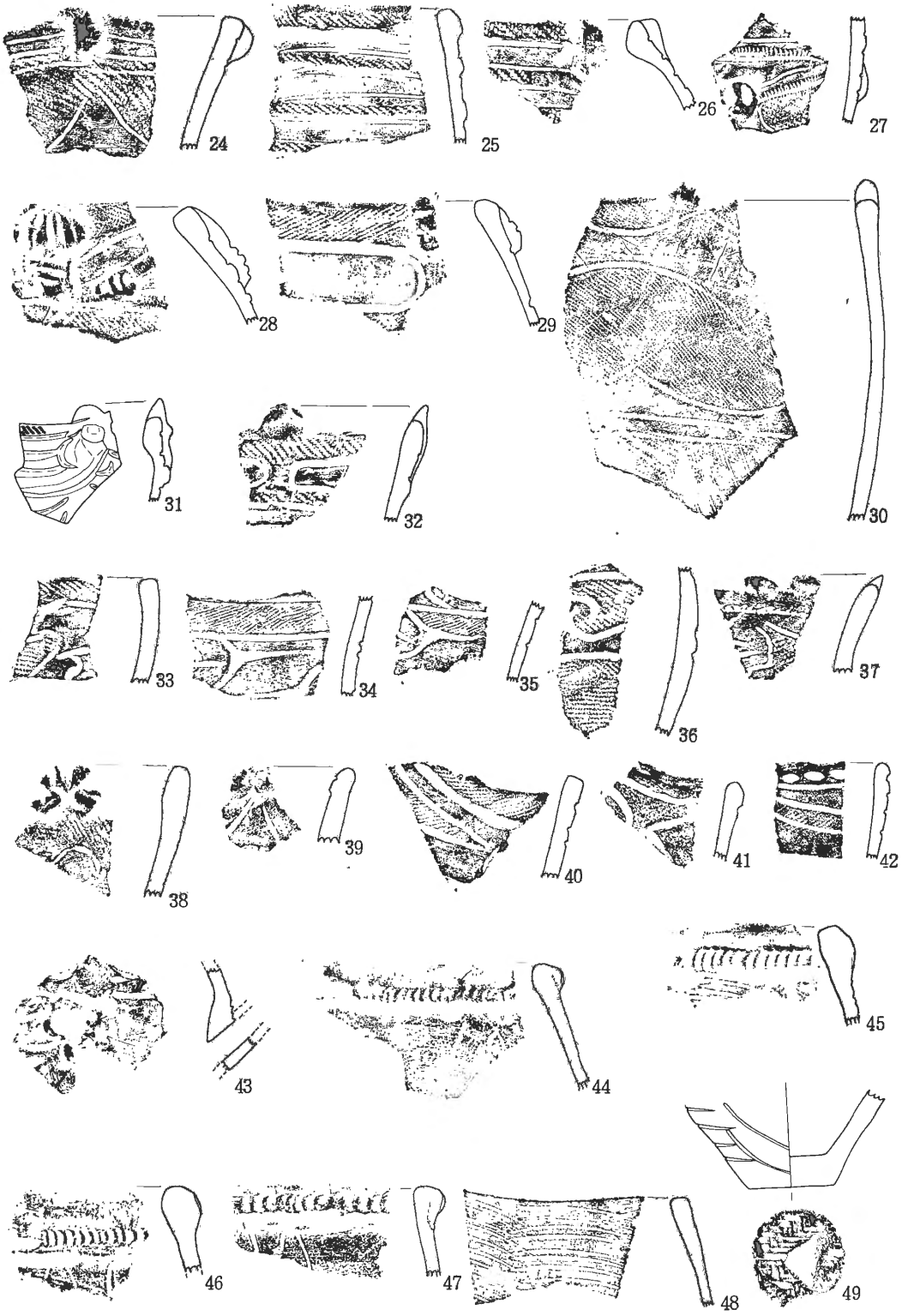
(1)　縄文時代中期の土器（第３図１～３）

１・２は加曽利ＥⅡ式土器、３は微隆起文を特徴とする加曽利ＥⅣ式土器である。この他に阿玉台式土器が第３地点より約20点採集されている。

(2)　縄文時代後期の土器（第３図４～第４図30）



第３図　野呂山田貝塚採集遺物(1)



第４図　野呂山田貝塚採集遺物(2)

0　10cm

4～7は地文の縄文上に沈線を施した堀之内Ⅰ式土器である。8・9は加曽利BⅠ式土器で8は口縁部裏側および頸部に圧痕を伴なう細い隆帯がみられ、9は把手と思われる。10～15は加曽利BⅡ式、16は加曽利BⅢ式土器である。17～22は曽谷式土器で、口縁直下に列点を伴なう狭い平行沈線と瘤状小突起および弧線文・連弧状磨消縄文に特徴付けられるもの、地文の縄文上に列点を伴なう平行沈線文を口縁直下に施しているもの、口唇部に列点を有し縦長の瘤状突起をもつ条線文の3者がみられる。23～26は安行Ⅰ式土器で曽谷式土器の伝統を引く瘤状突起を有する土器の他に帯縄文で構成される深鉢形土器がみられる。27～30は安行Ⅱ式土器で横刻みの瘤状突起と隆起帯縄文による枠状文に特徴付けられる土器と刻目を有する三角形内帯文に特徴付けられる土器がみられる。28は縦刻みの瘤状突起下に横刻みの瘤状突起を配し三角形内帯文は縄文が施されており安行Ⅲa式土器の範疇で考えられる。30は口縁部に突起と弧線状文を有し胴部上半には連弧状入組文、胴部下半には斜条線が施されている。

(3) 縄文時代晩期の土器（第4図31～43）

31～37は三叉状入組文・弧状入組文を有する鉢形土器。31は口唇部に小突起を配し細い隆線と三叉状の沈線文を施している。いずれも安行Ⅲa式土器である。39・40は姥山Ⅱ式、41は姥山Ⅲ式土器である。43は注口土器で表面が粗く文様が判然としないが注口部の下にw状の沈線がみられる。44～49は安行Ⅱ式～姥山Ⅱ式土器に伴なう粗製土器である。

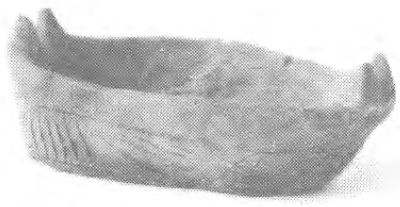
(4) 舟形土器（第5図・第6図）

全長12.3㎝、幅7.3㎝、高さ3.0㎝を計り、平面は楕円形を呈する。前後に2対の角錐の突起を有した痕跡がみられるが、3ケは欠損している。胴部文様は鋭利なヘラ先状工具による2本の平行沈線を廻らし、その後縦および斜方向の沈線が施される。胴部内外面ともに長軸方向に軽い削り痕および擦痕が顕著にみられるものの整形はあまり良く行なわれていない。削り・磨き→横位沈線施文→縦位沈線施文と行なわれ、沈線施文後の磨き等は行なわれていない。底部には網代痕と思われる痕跡がみられるが、その後の整形により不鮮明である。胎土中には細かい鉱物粒を含むものの焼成はかなり良い。色調は底部内外面から胴部下半まで黒色を呈し、胴部上半は黄褐色を呈する。舟の形を良く表わしているが、文様、整形等には特別な手法は加えられていない。加曽利BⅡ式土器である。

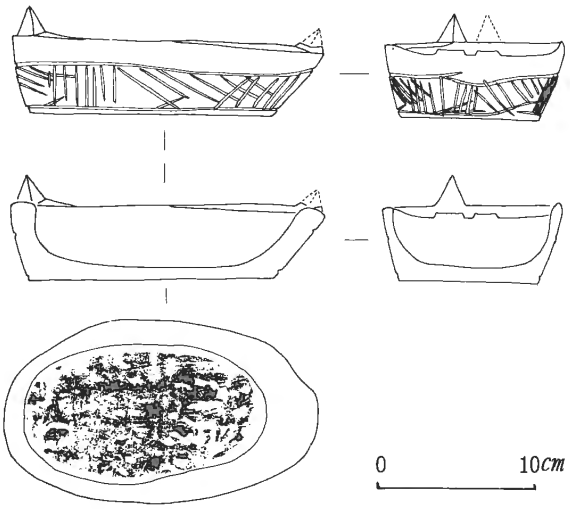
B　土製品

(1) 木菟土偶（第7図1）

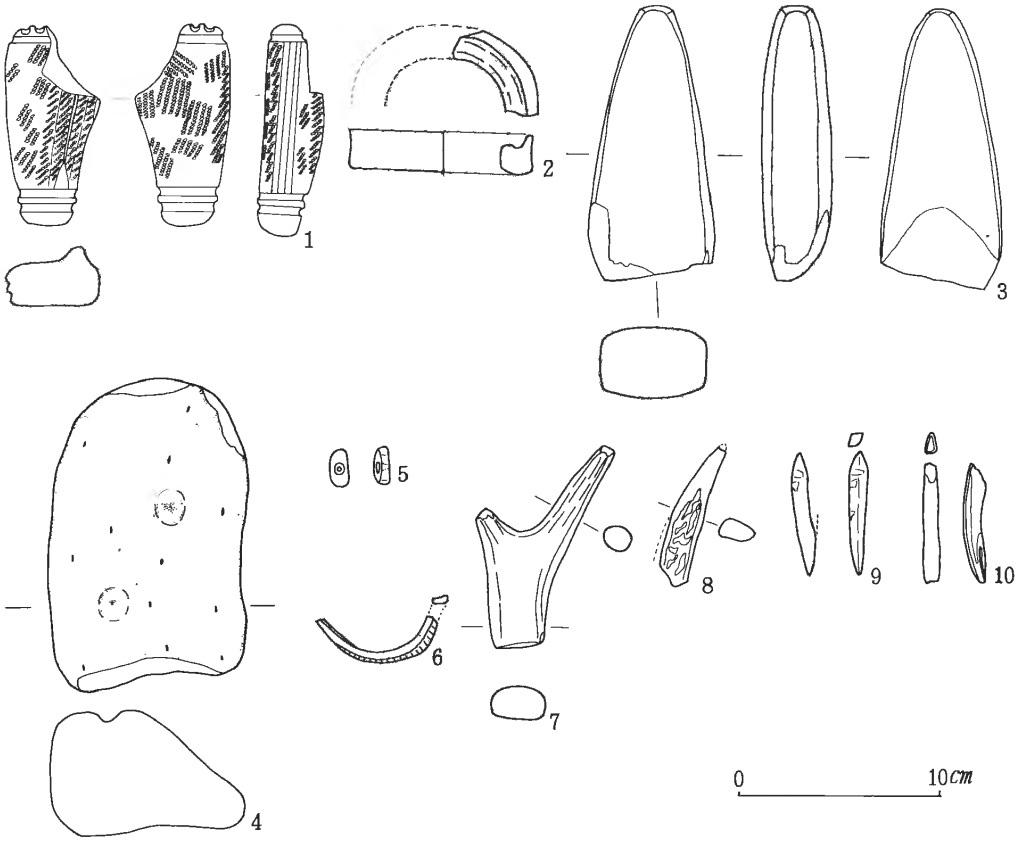
左脚部のみで台地北側の農道に敷かれていたものである。現存高は8.6㎝・幅4.0㎝・厚さ2.5㎝を計る。前面が断面三角状に盛り上り、上部に1本、下部に2本の横位の沈線を廻らす他、側面にも同様の沈線を縦方向に2本施し、腰部には浅い2本の沈線を縦位に施している。全面RLの縄文が施されており、一部に朱塗の痕跡がみられる。縄文時代後期の安行Ⅱ式期のものであろうか。



第５図　野呂山田貝塚採集遺物(3)
舟形土器



第６図　舟形土器　実測図Ｓ＝１／３



(2) 環状耳飾（第７図２）

全体の４分の１で装飾は全く施されていない。推定径7.8㎝、厚さ1.7㎝とかなり大型である。

C　石製品

(1) 磨製石斧（第７図３）

全長12.0㎝、幅5.4㎝、厚さ3.0㎝を計り、刃部を欠損しているがかなり大型の定角式磨製石斧である。全面に磨きがかけられており滑らかで輝緑岩製である。

(2) 石皿（第７図４）

現存長 15.0㎝、幅8.2㎝、厚さ5.1㎝を計り、大型の破片である。表面には直径1.5㎝程の小さな穴が２ケ所みられ、所謂「多孔石」と呼ばれるものである。安山岩製である。

(3) 垂玉（第７図５）

全長1.6㎝、幅0.8㎝、厚さ0.4㎝と小型のもので中心に径0.4㎝の穿孔がみられる。ヒスイ製。

D　貝製品（第７図６）

貝輪が１点採集されている。サルボウ製で良く研磨されている。

E　骨角器（第７図７～10）

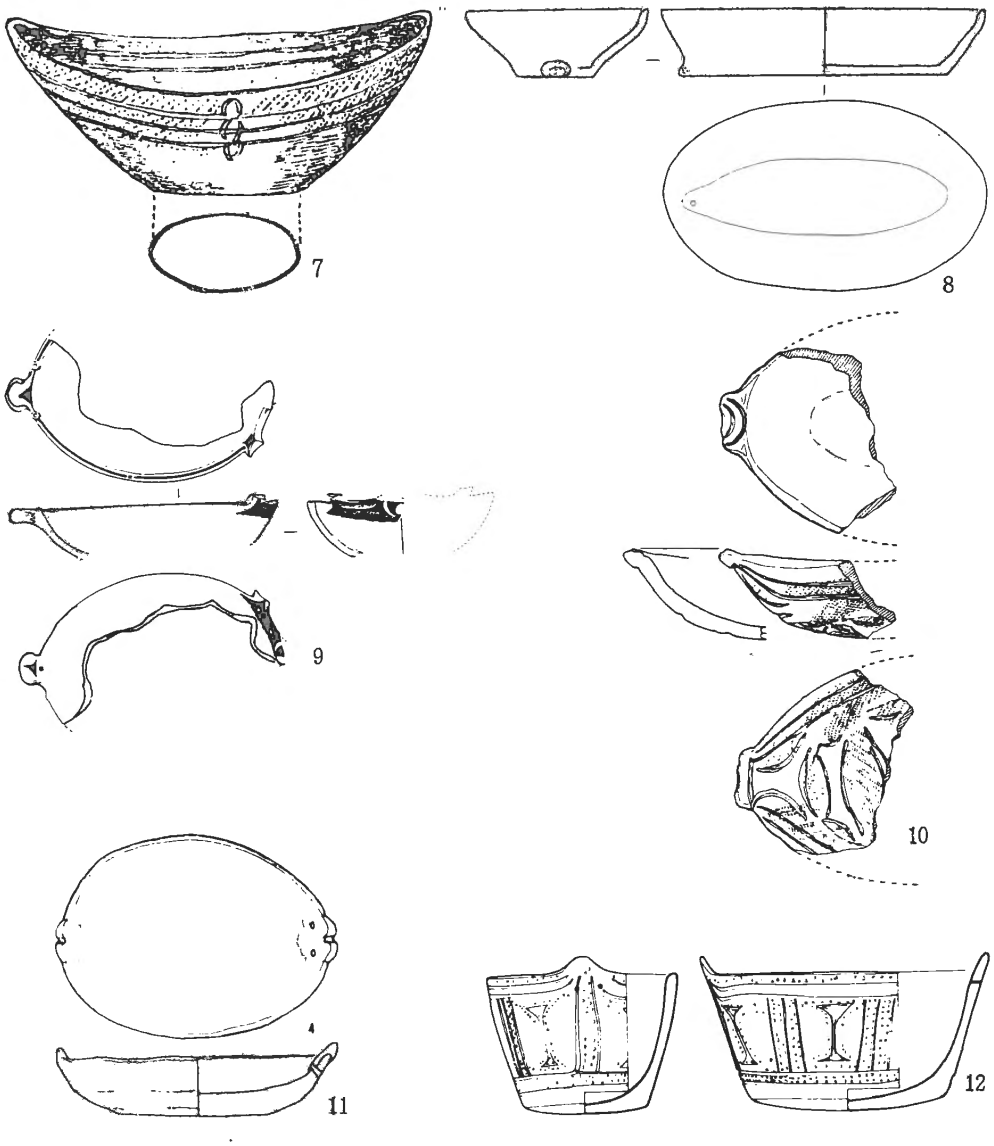
７と８は鹿角製で７は全長9.5㎝、幅2.6㎝、８は全長6.4㎝で両者ともによく研磨されている。９は全長5.2㎝、幅0.9㎝の骨針の先端部で、シカの骨を利用したものと思われる。10はイノシシの牙を利用したものである。

3　舟形土器について

舟形土器・舟底形土器と称される土器は関東地方を中心に各地より出土しており、広範な分布を示す（註１）。東日本では東京都田端遺跡・なすな原遺跡・神奈川県石神台遺跡・三の丸遺跡・王子台遺跡・千葉県姥山貝塚・西広貝塚・埼玉県深作東部遺跡群・高井東遺跡・群馬県千網谷戸遺跡・新潟県矢津遺跡等からの出土が知られ、縄文時代前期から晩期までの長期に亘ってみられる（表１）。

埼玉県深作東部遺跡群20号住居址出土例が最も古い例で縄文時代前期の関山式に伴なうものである（文献９）。平面は楕円形を呈し、口縁部は４単位の緩い単頭波状縁で波頂周辺には集合角状突起が付され、底部は緩い上げ底となっており底裏面は無文である。内面は入念な調整が加えられ、口縁部には無刻平行沈線による鋸歯状文および円形コンパス文を施し、胴部下半は縄文が施されている。出土状態は不明であるが、住居址覆土内から破片の状態で出土したようである。縄文時代中期の舟形土器としては新潟県吉野屋遺跡・清水上遺跡（文献10）があげられる。吉野屋遺跡出土例は、長軸両端が尖がり、口縁部内面に一条の沈線を廻らしており、胴部外面は縄文が施文されている。清水上遺跡は長軸両端が把手状に尖がる六角形を呈し、文様は施されていないようである。いずれも出土状態は不明である。

第８図　舟形土器集成図(1)



第９図　舟形土器集成図(2)

縄文時代後期の舟形土器としては東京都田端遺跡（文献11）・なすな原遺跡（文献12）・神奈川県石神台遺跡（文献13）・三の丸遺跡（文献14）・王子台遺跡（文献15）・仏向貝塚（文献16）・千葉県姥山貝塚（文献17）・加曽利貝塚（文献18）出土例があげられる。いずれも加曽利ＢⅠ式期のもので器形および出土状態にかなりの類似性がみられる。田端遺跡では配石遺構下のＤ11土壙墓とＤ22土壙墓の２基の土壙墓から、石神台遺跡でも配石遺構下の配石№11土壙から人骨に伴なう状態で出土しており、いずれも小型の浅鉢形土器に舟形土器を収めた入れ子の状態で出土している。なすな原遺跡でも 181 号土壙とＭ－６区からやはり小型鉢形土器に重ね

第1表　各地出土の舟形土器一覧表（註4）

No.	遺跡	出土地点	時期	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考	図版	文献
1	埼玉県深作東部遺跡群	20号住居址	関山	26.5×15.0	16.8×12.8	7.0		第8図 1	文献 9
2	新潟県清水上遺跡		中期						文献 10
3	新潟県吉野屋遺跡		中期				佐藤雅一氏教示		文献 10
4	東京都田端遺跡	D 11 土壙墓	加曽利BⅠ	14.1	5.1	7.7～9.0	小型鉢形土器と入子	第8図 2	文献 11
		D 22 土壙墓	加曽利BⅠ	10.5	6.6	4.1～5.3		第8図 3	
5	東京都なすな原遺跡	181号 土壙	加曽利BⅠ	12.3×10.2	6.6	3.9～5.1	小型鉢形土器2個体と入子	第8図 4	文献 12
		M－6区	加曽利BⅠ	12.6× 9.2	4.5	6.0～6.6	小型鉢形土器と入子土壙の可能性有	第8図 5	
		No.1地区遺構外	晩期前半					第9図10	
6	神奈川県石神台遺跡	配石No.11土壙	加曽利BⅠ				No.25人骨付近より出土小型鉢形土器と入子		文献 13
7	神奈川県三の丸遺跡	B 153号土壙	加曽利BⅠ	9.5× 7.5	4.5× 3.5	6.0	小型鉢形土器が伴出		文献 14
		B 172号土壙	加曽利BⅠ	9.0× 6.7	4.5× 3.5	4.0			
		B 184号土壙	加曽利BⅠ	15.0× 9.5	9.0× 7.0	7.6			
		B 246号土壙	加曽利BⅠ	12.0× 9.2	6.0× 5.0	6.5			
8	神奈川県王子台遺跡		加曽利BⅠ						文献 15
9	神奈川県仏向貝塚B貝塚	表採	加曽利BⅠ	9.7× 5.8	4.5× 3.6	4.0	突起周辺に朱塗	第8図 6	文献 16
10	千葉県姥山貝塚	M地点	加曽利BⅠ						文献 17
11	千葉県加曽利貝塚	CⅠ地点純貝層	加曽利BⅠ	17.0				第9図 7	文献 18
12	千葉県野呂山田貝塚	表採	加曽利BⅢ	12.3× 7.3	9.4× 5.6	3.0		第6図 1	
13	新潟県矢津遺跡	表採	晩期前半	14.0× 7.8	11.5× 3.1	2.9		第9図 8	文献 19
		表採	大洞B	11.7		<2.5		第9図 9	
		表採	晩期前半	<9.6		3.1			
14	群馬県千網谷戸遺跡		晩期前半	17.4× 8.7		3.6			文献 20
			千網	14.0× 8.5		4			文献 23
15	埼玉県高井東遺跡	グリット	安行Ⅲc	12.0× 8.7		3.0		第9図11	文献 21
16	千葉県西広貝塚	D－4区	安行Ⅲd	16.4×10.6	11.0× 6.8	7.8		第9図12	文献 22
17	千葉県吉見台遺跡	X－51区Ⅳ C層	加曽利B	5.5× 2.5	1.6× 1.6	1.8～2.3	袖珍土器		文献 26

られて出土している。三の丸遺跡では前記のような特殊な出土状態を示すものはみられないが4基の土壙から舟形土器が出土しており、このうちB 153号土壙で小型鉢形土器が伴出している。以上の舟形土器の器形はいずれも楕円形を呈し、側面はゆるい曲線を描き長軸両端に突起を有する。胴部文様は数条の平行沈線間に縄文や刻み目を充塡し無文部を磨くものが一般的でその分布は関東地方西部に集中しているが千葉県加曽利貝塚からも突起を持たない舟形土器が出土している。千葉県姥山貝塚M地点の埋葬人骨群からは内面に4条の沈線を有する舟形土器が出土しており、神奈川県王子台遺跡からは両者が出土している。これらの舟形土器が埋葬用の副葬品として用いられたことは出土状態より明確に推察される。

晩期前半の舟形土器としては新潟県矢津遺跡（文献19）・群馬県千網谷戸遺跡（文献20）および東京都なすな原遺跡出土例があげられる。いずれも後期の舟形土器とは系譜を異にしてい

る。矢津遺跡からは３例出土しており、平面楕円形で底部長軸端に貫通孔を有する平縁の無文土器と口縁長軸端に貫通孔を有する把手下に玉抱き三叉文を施した土器および小形土器が出土している。千網谷戸出土例は平面楕円形で長軸の１端に大きな把手がつき貫通孔を有する。なすな原遺跡出土例は口縁部破片のみで全容は不明である。

晩期中葉から後半の舟形土器としては埼玉県高井東遺跡（文献21）・千葉県西広貝塚(文献22)・群馬県千網谷戸遺跡（文献23）出土例があげられる。高井東遺跡出土例は幅の広い楕円形を呈し、舟の舳先にあたる部分に突起を持ちその下に２ケの孔がみられる。安行Ⅲｃ式期である。西広貝塚出土例は長軸に２ケの孔を有する山形の突起を持ち、胴部には土偶や石棒に多くみられる工字状文が施されており、安行Ⅲｄ式期に伴なうものである。千網谷戸遺跡出土例は長軸の１端が突起となっている無文の土器で千網式に比定されている。

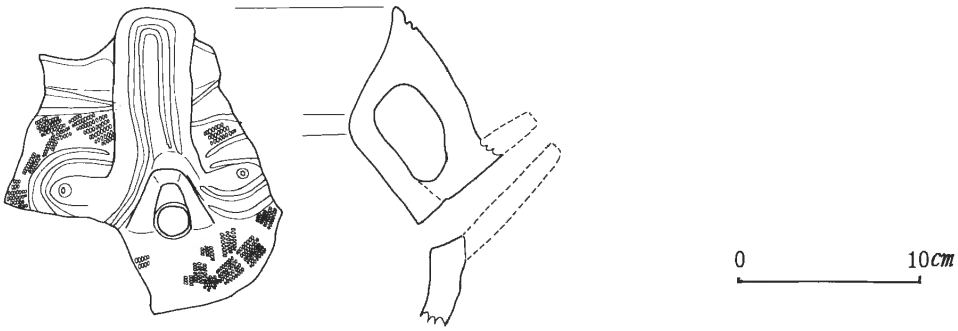
以上が各地から出土した舟形土器の概略であるが、現在まだ類例が乏しく系統的な分類を行なうことは困難であり、今回はその集成のみに重点をおいた。縄文時代以降、弥生時代及び古墳時代にも舟形を模した土器及び木器の出土例が若干しられている（註２）。特に奈良県纒向遺跡からは木製の舟と鳥のミニチュアがセットで出土しており、鳥や船が現世と他界を結ぶと云う所謂「天鳥船」の観念を表わしているものとみられている。生産基盤が異なる縄文時代においても同様の観念が存在したのかは今後の問題であるが、これらの舟形土器の出土状態等を検討してみると極めて祭祀的色彩の濃い遺物であることは疑いない（註３）。

おわりに

以上舟形土器を中心とした野呂山田貝塚採集の遺物について述べてきた。千葉市内にあって考古学的な調査研究は常に都川流域が中心をなしており、鹿島川流域の当地域が取りあげられたのは昭和31年に千葉県教育委員会によって行なわれた印旛・手賀沼周辺の総合調査を除いて皆無に近い。近年、僧御堂遺跡・芳賀輪遺跡・宮ノ台遺跡等の発掘調査及び全市に亘って行なわれた詳細な分布調査により除々ではあるが各遺跡の関係が解明されつつある。遺跡は現在畑として利用されているが、深耕でかなり荒されており、遺跡の中央部に機械格納庫が建設されてしまっている。周辺の遺跡群を含めた総合的な整備が望まれる。

前回紹介した八反目台貝塚の資料も今回の野呂山田貝塚の資料も共に地元の人々からもたらされたものであるが、筆者の怠慢により長年発表の機会を失なっていた。今回の発表でようやくその責務の一端を果すと共に今後の研究の助けとなれば幸いである。資料は加曽利貝塚博物館で公開展示されている。なお最後に前回で紹介した八反目台貝塚の追加資料があるので紹介したい。Ａ地点より耕作中に発見された注口土器の大型破片である。２条の沈線を施した大きな橋状把手下に注口部が存在し、文様はこの橋状把手を中心線としてほぼ左右対称の沈線でＬＲの細かい地文上に施されており、器面は良く磨かれている（第10図１）。堀之内Ⅰ式土器で

千葉市台門貝塚出土の注口土器に類例が求められる（文献24）。（千葉市教育委員会文化課）



第10図　八反目台貝塚採集遺物

〈註〉

1　東日本以外の舟形土器出土地としては大阪府森の宮遺跡・縄手遺跡・奈良県橿原遺跡および北海道東部の緑ケ岡遺跡があげられるが東日本の舟形土器とは形態を異にする。

2　静岡県山木遺跡・洞遺跡・千種遺跡等からは弥生時代の舟形の木製品が、石川県漆町遺跡からは古墳時代の舟形土器が出土している。

3　田端遺跡の調査者の１人である浅川利一氏は、「この異形小形の非実用的な土器は、同族で他の地方に行き消息不明となったものの安否を占う際の呪物であり、器中に少量の食料品を入れて供え、不明者の生霊または死霊を招いて近親者に消息を伝えたものと考えられ、被葬者はそれぞれ術者と思われる。」と述べている（文献25）。

4　計測値は原則として報告書記載の数値を用い、図より計測した数値を補足して加えた。

〈引用・参考文献〉

1　伊藤和夫　「貝塚より見た千葉市附近の海進海退」『古代』第28号　１９５８

2　伊藤和夫・金子浩昌　「千葉県石器時代地名表」　１９５９

3　酒詰仲男　「日本貝塚地名表」　１９５９

4　川戸　彰　「野呂山田貝塚」『印旛・手賀沼周辺埋蔵文化財調査（本編）』　１９６１
千葉県教育委員会

5　米田耕之助　「千葉県野呂奥新田出土の土偶・土版」『立正考古』第２６号　１９６８
鷹野光行　「関東地方の土版の分類について」『古代文化』第29巻第10号　１９７９

6　千葉市教育委員会　「千葉市野呂町道路拡幅工事に伴なう遺跡確認調査」　１９７６
千葉市教育委員会　「千葉市埋蔵文化財分布地図〈改訂版〉」１９８４　遺跡番号Ｊ－11－４

7　千葉市史編纂委員会　「千葉市史　原始・古代・中世編」　１９７４
千葉県教育委員会　「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書」　１９８３

8　川勝保博　「本校所蔵の考古遺物－その４－」『東邦考古』第７号　１９８１

市立市川博物館　「千葉県の土偶」　１９８０
9　黒坂禎二他　「深作東部遺跡群」　１９８４　大宮市遺跡調査会
10　新潟県史編纂委員会　「新潟県史　資料編Ⅰ　原始・古代Ⅰ」　１９８３
11　浅川利一・戸田哲也・笹村省三「田端遺跡調査概報（第１次）」1969 町田市教育委員会
12　成田勝範・重久淳一他　「なすな原遺跡－№Ⅰ地区調査－」　1974 なすな原遺跡調査団
13　高山　純　「大磯・石神台配石遺構発掘調査報告」　１９７４　大磯町教育委員会
14　伊藤　郭他　「三の丸遺跡発掘調査報告書」　１９８３　横浜市教育委員会
15　神奈川県民部県史編集室　「神奈川県史　資料編20　考古資料」　１９７９
16　石井　寛　「横浜市保土ケ谷区仏向貝塚の資料」『調査研究集録』第４冊　１９７９
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
17　戸沢充則　「貝塚文化」　『市川市史』　第１巻　１９７１
18　大山史前学研究所　「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告」『史前学雑誌』第９巻第１号
１９３７　史前学会
19　中島栄一・藤塚明　「矢津遺跡」『村松町史資料編』第１巻　１９８０
20　伊藤晋祐他　「群馬県桐生市千網谷戸遺跡調査報告」　１９８０　桐生市教育委員会
21　市川修・鈴木正博他　「高井東遺跡調査報告書」　１９７４　埼玉県遺跡調査会
22　米田耕之助・鷹野光行他　「西広貝塚」　１９７７　上総国分寺台遺跡調査団
23　薗田芳雄　「千網谷戸」　１９５４　両毛考古学会
24　千葉市史編纂委員会　「千葉市史　史料編Ⅰ」　１９７６
25　浅川利一　「田端の環状積石遺構にみる縄文時代後・晩期の葬法推移について」『長野県
考古学会誌』第19・20号　１９７４
26　山岸良二他　「佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ」　１９８３　佐倉市遺跡調査会